

今年の春は何となく「アコーディオン」という言葉が気になって仕方がなかった。すると折よく、知人の通うアコーディオン教室の発表会があるというニュースを得た。しかも私が学んでいる文学に関連する曲が含まれるクラシック演奏で。そこで好奇心が動いて案内をもらった。私はアコーディオンという楽器をよく知らない。ただシャンソン・フランセーズの伴奏にはとてもよく合うと思う。だから時々意識の中に浮かび上がる。そこでいつも本能的な好奇心から発する「見よう見まね」で物事を覚えていくタイプの私は、意識的に観察するためではなく、またしても自然に演奏以外の所に着目した。どこを操作して音の高低が出るのか、音を絞る時の蛇腹の角度で音がどう違うのか。またアコーディオンには右側が鍵盤になっている「ピアノ・アコーディオン」と、ボタンになっている「ボタン・アコーディオン」があり、右手はメロディーを弾き、蛇腹の左側のボタンでベース音や和音を奏でるが、何故か人によって演奏中にリズムを取るような不思議な音がする。「？」と思ったが、それは左手のボタン操作の音だと気付いた。そして演奏のノイズが聞えるか聞えないかで腕前の違いを納得した。歌でもそうだが、ブレスの音が聞えないほど上手。素晴らしい演奏者は呼吸からして違うので自身のブレス音も演奏中のノイズも皆無に等しい。演奏前に息を整えた瞬間から変わる空気。その清冽な気合からほとぼしる迫力が素晴らしい。

そこでこの曲を思い出す。セルジュ・ゲンズブールが書き、ジュリエット・グレコが歌った『Accordéon』 フランス語だと「アコルデオ」と発音するが、楽器の特徴を表したリズムと共に歌詞の韻の踏み方が相変わらず絶妙だ。「vivre」「enivre」—「chemise」「verbalise」—「massacre」「nacre」—「lassitude」「solitude」 また表記は違っても発音が同じもの「cruelle」「relles」—「bretelles」「ficelle」なども耳に心地よい。圧巻は「accordéon」と必ずペアで出てくる言葉の羅列「compagnon」「maison」「violon」「veston」「horizon」「attention」そして「Son copain son compagnon」のように似た文字の組み合わせもちょっと感覚に響くし、「Accordéon(アコルデオ)」と「Accordez donc(アコルデ ドン)」はかなり面白い。また韻を踏ませる役割も担う「Ils sont comm'cul et chemise (尻とシャツのような存在)」＝「離れられない関係」というフランス独特の表現は、日本的にはピンと来ないが、フランス語表現を覚えるのに一役買う。因みに歌詞の中に「シュミーズ」「パンタロン」という言葉が出てくるが、今も辞書に図と共にその表記で載っている女性のランジェリー「chemise(シュミーズ)」は、フランスでは主に男性用の「シャツ・ワイシャツ」である。また1960～70年代頃、主に女性のファッションとして流行った裾の広がったズボン「pantalons(パンタロン)」は、フランスでは細身のズボンである。また日本ではアメリカ文化の影響が強く「シュミーズ」は「スリップ」に、「パンタロン」は「ベル・ボトム」という言葉に取って代られたが、厳密に言うと内容が少し違うらしい。何はともあれコレセットでウエストを締める時代に生まれなくてよかった。

さて話はそれだが、シャンソン・フランセーズのアコーディオンといえばミュゼット。もともとバグパイプから発生した民族音楽のようだが、ピッチはずれが独特のリズムを醸し出すミュゼットは、アコーディオンの機能においては調律が難しいらしい。いずれにしてもフランス人が愛するフランスらしい音楽であるようだ。(2013.6.5)